

4. 苦しみの種類

ペテロの手紙#4

<https://ichthys.com/Pet4.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

苦しみ： ペテロは紀元 1 世紀、小アジアに住む信者たちに向けて二つの手紙を書きました。当時の初期キリスト者たちは大きな困難に直面しており、その苦しみが彼らの霊的成長を妨げ始めていたのです。最初の手紙でペテロが特に取り上げているのは、この「苦しみ」という問題でした。実際、この短い手紙の中で彼は「苦しむ」という意味のギリシヤ語 *pascho* (パスコー, *πάσχω*) を、パウロが全書簡を通して用いた回数よりも多く使っています。人生の試練や挫折、失望、病気、その他さまざまな形の苦しみは、信仰生活にとってつまずきの原因となりうるのです。

私たち信者は「神の怒りから救われ、イエス・キリストの血によってすべての罪を赦され、今は神の子どもとされた」と告白します。ではなぜ、この地上での生活が時にこれほどまでに困難であり、深い痛みを伴うのでしょうか。聖書的な答えを持たなければ、激しい苦しみは必ずや信仰に大きな圧力をかけ、神を疑う誘惑へと導いてしまいます。しかし神は、そうした疑いと戦うための武器——すなわち御言葉の真理を与えてくださいました。聖書に記された真理によって、私たちは信仰を守り、直面する苦しみの意味を理解し、それに耐え抜くことができます。その結果、神の栄光が現され、私たち自身も霊的に成長していくのです。ペテロが第一の手紙を書いた目的は、当時の苦境に立たされていた信者たちに、この「苦しみの試練」を乗り越えるために不可欠な真理と励ましを与えることでした。そしてその教えは、二千年近く経った今も、私たちにとって同じように重要なのです。

苦しみの種類： 私たちが扱いやすくするために、苦しみの原因を聖書の観点から分類してみましょう。最も広く見られるのは、一般的な人間の苦しみと呼べるものです。神のご計画によって、物理的な宇宙は「自然の法則」と呼ばれる一定のパターンに従って動いています。同じように、人間の世界にも、すべての人の良心に刻まれた「普通の人間の行動の原則」が神によって定められています (ローマ 2 章 14-15 節)。そして、人間はその原則をまとめ、体系化しようとします。これを「人間の定めた法」と呼ぶことができます。

もし私たちが「自然の法則」や「人間の定めた法」のどちらかを無視すると、必ず苦しみが生じます。たとえば、重力の法則を無視して 2 階の窓から飛び降りれば大けがをす

るでしょうし、またテレビをお金を払わずに持ち帰れば問題になります。運よくその場では悪い結果を免れることがあるかもしれませんが、自然の法則や人間の定めた法を繰り返し無視すれば、必ず苦しみを招くのです。もちろん、自然の法則や人間の定めた法を避けようがない場合もあります。自然の面では、誰もが人生の中で何らかの病気にかかりますし、人間の法の面では、法律を守ること自体が負担になることもあります（たとえば税金を払うことなどです）。極端な状況では、その苦しみは非常に激しいものになります。自然災害の被害者や、「治安維持」の名のもとに行われる政治的迫害を考えてみればわかります。要するに、この物理的な宇宙の働きや人間の歴史の流れの中では、苦しみは自然なこととして起こるのです。私たちは皆それを理解しており、多くの場合、その苦しみの背後にある自然的または政治的な原因を見分けることができます。

人間一般の苦しみの起源：神とその完全さや善を信じる者として、私たちは「なぜそもそも痛みや苦しみが存在するのか」「なぜ政治的迫害や自然災害があるのか」と問いたくなるでしょう。この問いへの短い答えは、苦しみは悪から生じ、そして悪は神からではなく、神に造られた被造物から生じた、ということです。このテーマについては他の箇所でも詳しく学ぶことになります（[「サタンの反乱」](#)シリーズを参照）が、ここでも苦しみの起源について少し触れておきましょう。

神が最初に創造された宇宙には、「天使」と呼ばれる特別な被造物が含まれていました。天使は人間よりも優れた力を持ち、しかも自由意志を与えられていました。その中のひとり、特に優れた天使が大きな権威の地位を神から与えられていましたが、彼は心の中で神に反逆することを決意し、宇宙の支配者として神に取って代わろうとしました（イザヤ 14 章 12-21 節；エゼキエル 28 章 12-19 節）。聖書はこの反逆がどのように進んだのか、詳しい経過については多くを語っていません。しかし、サタンと彼に従った天使たちに対する神の最終的な勝利が確実であることははっきりと示されています（ルカ 10 章 18 節；ローマ 16 章 20 節；黙示録 20 章 10 節）。

全能の神は、限りある被造物のひとりにすぎないサタンを押さえつけることなど、当然なんの困難もありませんでした。しかし神はすぐにそうはなさらず、サタンとすべての天使たちに次のことを示そうとされたようです。すなわち、サタンとその仲間が本当に自由意志を持って選んだのであって、神がサタンを造られたからといって、サタンが選んだ悪の責任が神にあるわけではない、ということです。その証明のために、神は人間を造られました。人間は力の点では天使よりもはるかに劣りますが、同じように自由意志を与えられていました。ここでサタンの運命を決する最終的な戦いが始まりました。サタンにとって、自分の裁きを逃れる唯一の望みは、この「被造物の自由意志を通して神に従うことができる」という神の証明を妨げることでした。もし人間が神を選ぶなら、サタン

自身が自らの選択に責任を持っていたことが、疑いなく証明されてしまうからです。そこでサタンは、人間の最初の先祖を墮落させることによって(創世記 3 章)、人間を神から引き離そうとしました。しかし神は人間に解決の道を備えられました。人は自由意志を用いて神に背き、罪に陥りましたが、神はもう一度自由意志を用いて神に従う機会を与えられたのです。すなわち、「来たる救い主」を信じる信仰によって神に従うという機会です(創世記 3 章 21 節の「皮の衣」は、その提供のために犠牲にされた動物を通して、キリストの十字架の死をあらかじめ示すものです)。

では、これまでのことが「人間一般の苦しみ」とどのように関係しているのでしょうか。神が人間を造られたとき、男と女として造り(創世記 1 章 27 節)、完全な存在として、また完全な場所——すなわちエデンの園に置かれました。ここで言うエデンの園は、ヘブル語 ガン・エーデン(גֶּן־עֵדֶן, gan-‘eden)で、「喜びの園」「楽しみ園」という意味です(創世記 2 章 8 節)。この完全な環境と完全な状態の中では、人は苦しみを知りませんでした。やがて来る新しい樂園においても、苦しみは再び存在しなくなります(黙示録 21 章 4 節)。しかし、創世記 3 章に記されている人間の墮落の結果として、人類すべてがこの世で「人間一般の苦しみ」を受けるようになりました。神はアダムとエバに、「善悪の知識の木」の実を食べれば必ず死ぬと警告されました(創世記 2 章 17 節)。それは、すぐに起こる霊的死(神との断絶)、やがて訪れる肉体の衰えと死、そして最終的な永遠の裁きを意味していました。罪を犯した後、アダムとエバはエデンの完全な樂園から追放され(創世記 3 章 22-24 節)、彼らの人生に新しい要素——「苦しみ」が入り込んだのです。エバには「痛み」(創世記 3 章 16 節)が、アダムには「労苦」が告げられましたが、どちらの言葉も同じヘブル語の語根 アツァヴ(אָצַב, ‘atsab)から来ており、「傷つくこと、痛むこと、悲しむこと」を意味します。つまり、アダムとエバは私たちすべての子孫に「人間一般の苦しみ」という遺産を残したのです。けれども、私たちが最初の人間とのつながりによって苦しみと死を受け継いだのに対して、神は御子イエス・キリストを信じる信仰を通して、ご自身との新しい関係を提供してくださいました。その関係は、喜びと永遠のいのちをもたらします。というのも、「アダムにあってすべての人が死ぬように、キリストにあってすべての人が生かされるからです」(第一コリント 15 章 22 節)。

神はアダムとエバに裁きを宣告するただ中で、同時に希望の約束も与えられました。すなわち、「女の子孫(＝キリスト)がやがて蛇(＝サタン)の頭を打ち砕く」と告げられたのです(創世記 3 章 15 節)。この勝利は十字架において成し遂げられました(ヘブル 2 章 14-15 節)。それゆえ、キリストを信じる私たちは皆、確かな希望を持って将来の日を待ち望んでいます。その日には、この「痛みのある体」がよみがえらされ、完全な体へと変えられるのです(第二コリント 5 章 1-10 節)。そして私たちは、父なる神と

御子イエス・キリストと共に、新しい樂園、すなわち新しいエルサレムで永遠に生きることになるのです(黙示録 21-22 章)。

信者の苦しみについて： 私たち信者は、神の計画の「第Ⅱ段階」(時＝この世の生涯)の中に生きています(ペテロの手紙#3 参照)。「第Ⅰ段階」(救い)は、私たちがイエス・キリストを救い主として受け入れた時に終わりました。そして「第Ⅲ段階」(永遠の御国)は、まだ地上に生きている私たちには始まっていません。私たちの心はキリストへの従順によって変えられましたが、肉体は救いの前とまったく同じであり、また私たちが信じる前と同じ不完全な世界に住み続けています。したがって、私たちは依然としてアダムとエバの墮落以来、人類全体を苦しめてきた「一般的な人間の苦しみ」を避けることはできません。しかし、この第一の人類全般の苦しみと、信者が経験する苦しみとの間には、いくつかの非常に重要な違いがあります。

第一に、私たちの苦しみには必ず終わりがあります。信仰によって、私たちはやがてこの人生の痛みや涙から解放されることを確かなこととして知っています。そして被造物そのものがそうであるように、私たちもこの解放を心から待ち望んでいるのです。なぜなら、今この世で経験する苦しみは、将来天で与えられる素晴らしい栄光と比べれば、比べものにならないほど小さいものだからです(ローマ 8 章 18-23 節)。

第二に、私たちがどのような苦しみを経験するとしても、それはすべて神のご計画の一部であると知っています。たとえ痛みを伴う苦しみであっても、その最終的な結果は、天の父なる神の知恵とあわれみによって、必ず私たちの益となるのです(ローマ 8 章 28 節)。

しかし、信仰が壊れてしまうのを防ぐためには、信者だけが経験する特別な二種類の苦しみをきちんと区別することがとても重要です。ペテロが手紙を書いた信者たちは、この二種類の「信者の苦しみ」の違いを理解するのに苦労していました。その二種類とは――

- (1) 試練としての苦しみ
- (2) 神による懲らしめ

試練としての苦しみ： この言葉は、信者に試練や困難が与えられることを意味します。それは神が信者を試し、鍛え、成長させるために許されるものであり、同時に神の栄光を現すことにもつながります(ヨブの例を思い出してください)。このような苦しみに直面するとき、信者はしばしば「神は自分を気にかけていないのではないか」「神が

罰しているのではないか」と誤った結論に陥りやすいのです。しかし、クリスチャンの人生に困難があるからといって、それが必ずしも神の不満を示しているわけではありません。後の学びで見ていくように、霊的成長はある程度の試練なしには決して可能になりません。困難の中で神がどれほど忠実に私たちを支えてくださるかを示す機会となり、同時に私たちも不利な状況にもかかわらず神を信じ続けることによって、自らの信頼を証しすることができるのです。

キリスト者として、困難に直面したときに主観的になりすぎず(自分のことばかりに目を向けず)、客観的であることが絶対に必要です。天の父は、私たちのためにそのひとり子を死に渡すほどに私たちを愛してくださったのですから、他の困難においても必ず助けてくださることを思い起こすべきです(ローマ 5 章 8-9 節)。もし私たちが何も悪いことをしていないのであれば、心の「押し入れ」を開けて、過去の罪が現在の苦しみの原因ではないかと探し出すようなことをしてはなりません。神は赦しと恵みによって私たちを取り扱われます。ずっと昔に犯した罪で、すでに告白し、赦され、神によって処理済みのものが、今の問題の原因であることはありません(ヨブとその友人たちの誤った結論と比較してください)。私たちは誤った、余分な罪悪感を避けなければなりません。そうでなければ、それが私たちの霊的生活を破壊する可能性があるからです。ペテロが第一ペテロを書いた目的の一つは、この点に関する混乱を取り除くことであり、その混乱が小アジアの信者たちの霊的成長を脅かしていたのです。

神による懲らしめ：確かに、私たちは完全な存在ではありません。だからこそ、私たちの代わりに死んでくださる完全な救い主、イエス・キリストが必要だったのです。キリストの血によって、私たちはあがなわれ(第一ペテロ章 1 章 18 節)、罪の力から買い取られました。しかし、私たちはいまだに不完全な肉体に住み(ローマ 7 章)、不完全な世界に生きているので(ヨハネ 17 章 15 節)、残念ながら、信者となった後でも完全に罪を犯さずに生きることはできません(第一ヨハネ 1 章 10 節)。それでも私たちは、聖め(=神に近づく生き方)を追い求めるよう命じられているのです(ヘブル 12 章 14 節)。

神は義なる方であるゆえに、信者が犯す罪に対して必ず向き合われます。しかし、それは愛に満ちた父としての対応です。私たちが自分の子どもを本当に愛しているなら、子どもが悪いことをしたときに懲らしめるでしょう。それは怒りをぶつけるためではなく、子どもの行動を正し、その益のために行うのです。神が私たちの罪に対してなされることも、それと同じです。ヘブル人への手紙 12 章では、神は「愛する者を懲らしめる」と記され(6 節)、神の真の子どもであるなら誰もが懲らしめを受けると教えています(8 節)。神が懲らしめを与えられる目的は、私たちを押しつぶすためでも、滅ぼすためでも、怒りを注ぐためでもなく、私たちを正し、訓練し、神が望まれるクリスチャンへと形

づくるためなのです(10-11 節)。

では、私たちは自分の罪と、それによってもたらされる神の懲らしめにどのように向き合うべきでしょうか。まず第一に、霊的に成長し続け、神のことばの真理を学ぶ中で、何が罪であり、何が罪でないかをよりはっきりと見分けられるようになります。もし罪を犯してしまったときには、ヨハネ第一の手紙 1 章が、その状況を正し、再び神との交わりに戻るための大切な手順を教えてください。8 節では、「私たちは皆、罪を持っている」(すなわち罪の性質を持ち、罪を犯しやすい存在である、伝道者の書 7 章 20 節参照)とヨハネは語っています。しかし 9 節では、「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」と記されています。ここで「告白する」と訳されているギリシヤ語はホモロゲオー(ὁμολογέω, homologeō)で、もともとの意味は「認める」ことです。ですから、もし私たちが罪を犯してしまったとき、ただ単純に祈りの中で神にその罪を認めるなら、聖書は、神がその罪を赦し、さらにその罪だけでなく、私たちが陥った「すべての不義」からも清めてくださると約束しているのです。

では、私たちは罪に対して罪悪感を抱くべきなのでしょうか。罪を犯したことを悲しく思うのは自然なことですし、神の懲らしめによって痛みを経験すれば、そのことを残念に感じるのも当然です。しかし、決して忘れてはならないのは、ここで本当に重要なのはキリストであるということです。なぜなら、私たちの本当の罪の重荷を十字架で背負ってくださったのはキリストだからです(第一ペテロ 2 章 24 節)。神は私たちに、悔い改める心、つまり自分の罪を正直に認め、その罪が本当に罪であると告白する心を求めておられます(詩篇 51 篇 17 節; イザヤ 57 章 15-16 節, 66 章 2 節参照)。しかし同時に理解しなければならないのは、神にとって問題となるのは私たちの感情ではなく、キリストが十字架で成し遂げられた御業なのです。

実際のところ、もし私たちが自分の罪のために自分を感情的に苦しめたり、何らかのかたちで自分自身に罰を与えたりして「罪滅ぼし」をしようとするなら、そのことで私たちの問題が解決されるわけではありません(エサウやユダの場合を参照)。私たちの罪のために苦しむのにふさわしい方は、ただイエス・キリストだけです。そして、神である父が受け入れられるのは、イエス・キリストの御業だけなのです。ですから、私たちがどれほど罪を悔やみ、罪悪感を持ったとしても、それだけで神の前に私たちの罪が清算されるわけではありません。それどころか、度を越した罪悪感や、自ら課す感情的な自己処罰は、かえって神を侮辱する危険があります。なぜなら、それはまるで「キリストがしてくださったことは十分ではない。自分も償いを加えて神を助けなければならない」と言っているかのようだからです。

罪に対する正しい態度：[詩篇 51 篇](#)におけるダビデの態度こそ、罪を犯した信者にとって正しい姿勢です。ダビデは神の懲らしめによる痛みを深く苦しみましたが、自分の罪を神に認め（告白し、告白するとはつまり「認める」こと）、そして神に回復を願い求めました。彼は罪を犯したことを心から悲しんでいましたが、その中心にある問題は自分の感情ではなく、神のご性質（[4 節](#)）と神のあわれみ（[9 節](#)）であることを理解していました。この正しい姿勢で罪を認める信者に対する神の態度は、「放蕩息子」のたとえ（[ルカ 15 章](#)）に示されています。息子はまず、自分が父に対して罪を犯したことを告白しました（[21 節](#)）（[21 節](#)）。そして、たとえ家でもべのような身分になってもよいと覚悟していました（[18-19 節](#)）。しかし父は彼の罪にもかかわらず赦し、喜びと感謝をもって迎え入れ（[22-24 節](#)）、息子としてのすべての特権と祝福を回復してくれたのです。同じように、神はキリストの十字架の死を土台として、私たちがどんなことをしてしまったとしても、またどれほどつらい気持ちを抱えていたとしても、ただ神のもとに立ち返り、自分の罪を素直に認めさえすれば、恵みによって赦し、回復していただけます。

復習：人間一般の苦しみ：これは、アダムとエバの神への不従順によって、受け継ぐことになった共通の遺産です。しかし、イエス・キリストの犠牲によって、すべての人が神の子を救い主として受け入れるなら、再び父なる神の愛に抱かれる道が備えられました。キリストを信じた後、クリスチャンはこの世から取り去られるのではなく、この世に残されて、霊的に成長し、神に栄光を帰すようにされているのです。

試練としての苦しみと神の懲らしめ：私たちが悪魔の支配するこの世に生きている以上、避けられないのは、霊的成長や祝福のための（そして神の栄光のための）「試練としての苦しみ」だけでなく、罪の結果として受ける苦しみ、つまり罪に続いて与えられる神の懲らしめです。信者は、この二つの種類の苦しみをしっかり区別することが不可欠です。罪の告白（[第一ヨハネ 1 章 9 節](#)にあるように、単純に自分の不従順を神に対して祈りの中で打ち明けること）は、ただちに赦しと清め、そして神との交わりの回復をもたらします。一方で、試練としての苦しみは信仰の試練であり、どんなに状況が厳しく見えても、神が必ず私たちを困難から救い出してくださると信頼する機会でもあります。**試練としての苦しみに対する解決策**は、後の学びで詳しく見るように、神の力と恵みに安らぎを見いだすことです。

神の懲らしめによってもたらされる苦しみに対する解決は、罪をただちに告白することです。罪を告白するなら、その罪は赦され、信者は完全にきよめられます。私たちが神に罪を告白するとは、自分の不従順を認めることです。もちろん、同じ過ちを繰り返さないように願うのは自然で健全なことです。罪悪感や「申し訳なく思う」感情は神に影響を与えるものではありません。神の方針は恵みです。つまり、神はご自身の善と栄光のために、そしてキリストが十字架で成し遂げてくださったことに基づいて、自由

に赦してくださるのであって、私たちが罪の償いとして何かをしようとする行いに基づくものではありません。罪の告白は、キリスト者の生き方における不可欠の条件です。すべての信者は罪を犯すゆえ、すべての人がその罪を犯すたびに告白しなければなりません。それこそが赦され、きよめられ、再び神の計画の第Ⅱ段階における第一の使命—**霊的成長**—に向かって前進できる唯一の道なのです。

ですから、告白していない罪や、過去の罪に対する過度の罪悪感が、私たちの行く手を阻むことのないようにしましょう。